



昭和57年の8月より1年余、ワシントン D. C. にある国際食糧政策研究所 (International Food Policy Research Institute, IFPRI) へ研究員として出張する機会に恵まれ、家族とともにワシントン近郊に滞在し、昨年9月に帰国しました。ここでは出張先の研究所 IFPRI について書いてみます。

IFPRI は名前の通り、スタッフ面でも資金面でも世界の多くの国々からの貢献で成立しています。有名な IRRRI (国際稲作研究所) や CIMMYT (国際とうもろこし・小麦改良研究所) などと兄弟関係にあります。これら国際農業研究所は世界に10ほどあり、低開発国の農業の研究を行っており、CGIAR というこれら研究所の研究を総合的に調整する国際協議機関の下にあります。IRRI や CIMMYT はそれぞれ、高収量品種 (HYV) の米と小麦を開発・普及し、熱帯農業におけるグリーン・レヴォリューションの端緒を開き、CIMMYT のボーローグ博士は HYV 小麦の開発でノーベル賞を受賞したことで有名で、20年ほどの歴史のある研究所ですが、IFPRI は10年ほどの歴史しかありません。また国際農業研究所は、IFPRI を除き自然科学的方法に重点をおいた研究所ですが、IFPRI のみ経済学・農業経済学的方法に重点をおいており、先進国に所在しているという特徴を持っています。このような IFPRI の特徴も一因となって、最近「研究の研究」という分野を一つの重点とし、各国際研究所の研究の関連性の研究や方向づけの研究を行おうとしています。IFPRI も、その所員に研究上、他の国際農業研究所とできるだけ連携を強めていくよう要請しています。

IFPRI と日本との関係は最近まであまり強くはありませんでした。IRRI などには、日本政府は昔から直接研究資金の援助をし、また日本人研究者を

IFPRI とそこでの東南 アジア関係の研究

辻 井 博*

派遣してきました。しかし、IFPRI とは1982年まで日本政府はそういう関係になく、同年8月に私がはじめての日本人研究者として IFPRI に勤務することになりました。さらに、1983年からは日本政府が IFPRI へ直接に研究資金の支出をするようになりました。また、前外務大臣の大来佐武郎博士が1983年から IFPRI の理事に就任され、日本と IFPRI の関係は急速に深くなっていっています。

IFPRI はワシントンの中心部の、18~19世紀の建築物の多い地域に位置し、ホワイト・ハウスへも徒歩10分くらいのところにあります。研究員は20名ほどの世界各国人からなり、アメリカ人は少数派です。所長はフランス生まれのメラー博士で、農業発展論・食糧問題分野で高名な方です。研究所は研究部門と行政部門に分かれ、研究部門は次の四つの研究プログラムからなっています。

- (1)食糧トレンド分析、(2)食糧生産政策・開発戦略、
(3)食糧消費・栄養政策、(4)国際食糧貿易・食糧安全保障

行政部門は図書資料サービス、計算・研究補助サービスと研究所行政の三つからなり立っています。私が感心したのは、これら全ての構成要素が、研究員がより質の高い研究をより速く完成するという目的のため、できるだけ効果的に結合され、また外部条件の変化に従って常にその方向に結合の調整がなされていることでした。このことは当然のことのようですが、日本の研究機関ではなかなか簡単には実行できず、研究資金集めの責任と人事権との重要部分が所長に帰属した西欧型の研究機関だからこそできるのでしょう。IFPRI もこの範疇に属します。このような研究機関の場合、当然その発展は所長個人の能力に大きく依存してきます。所長は非常に忙しく、常に強いプレッシャーの下におかれます。メラー博士もそのような状況の下で仕事をされていました。しかし、独裁というやり方ではなく、研

* Hiroshi Tsujii, Faculty of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto 606, Japan

究・人事・行政の各面で所員と常によく相談して所長業を実行されているようでした。さらに私が驚いたのは、このように忙しい所長業と同時に、世界一流の学会誌に次々と論文を発表されていることでした。

私はこのような研究所で1年余研究することができたわけで、とても有り難く感じました。「メラー博士により作られている研究所で仕事をしている」というような実感を強く受けました。また研究員間の公式、非公式の交流も強く、特に毎日の他の研究員との多くの会話から私は大きな利益を受けました。

各研究員の研究は上述のような枠組の中で行われます。各研究員には、ほぼひとりの助手とクォーター・タイムぐらいのセクレタリーがついています。上述の計算サービスからは、計算機の使用について随時援助が受けられます。IFPRIの基幹出版物たる研究員の研究報告に対しては、所内のみならず、特に世界の各分野の第一線の人々によるレフェリー制度が厳格に運用され、IFPRI研究報告の質が維持されています。私にはこのような研究制度は非常に能率的・生産的であると感じられました。特に世界から多くの第一線の研究者が集まり、低開発国の食糧政策の研究に関して毎日影響し合いながら、共同で、または個人で研究を行うことの研究上の集積の利益の大きさを、短い期間ではありましたが体験できたことは有り難かったです。

IFPRIでは、特に低開発諸国における食糧不足問題を解決するために、食糧生産、食糧消費と食糧貿易の相互依存関係の総合的研究を行い、食糧生産の停滞、および貧困、雇用機会不足、食糧流通システムの不備などに基づく、消費者の購買力の不足を解決するための諸政策の究明を行なっています。この研究を進めるに当たって、食糧の安全保障とリスクの問題、一国内における農業部門と他の産業部門とのリンケージの問題、食糧生産における新技術の採用問題、サハラ南部の食糧問題などに重点がおかれています。また研究は村レベル、地域レベル、国レベル、世界レベルの各レベルで行われています。

私は上述の第4プログラム、「国際食糧貿易・食糧安全保障」に所属し、チリ人の国際経済学者ヴァルデス博士がプログラム・リーダーで、タイ人、フィリピン人、イスラエル人、イギリス人、ドイツ人、アメリカ人らの同プログラムの同僚とともに研究を

行いました。私の研究計画は中心が「タイ国の貿易政策と農業発展の計量経済学的研究」であり、ワシントンで同僚との話合いから発展した「日本の水稻の保険制度の経済分析」が第2の計画になりました。上述のようなIFPRIの環境の中で、私が日本で考えていたタイ国の農業発展の研究の計画は、スコープや方法論で大きく発展変化しました。

第2次世界大戦後タイ国では、一般貿易政策と経済発展戦略および農産物貿易政策が、その農業発展と経済発展の性格を強く規定してきました。そして、この発展の性格は、労働吸収、所得分配、貧困、森林、土壌など天然資源の破壊などで深刻な問題をタイ国内に引き起こしてきました。これらの関連を経済学的に明らかにし、これら問題を解決するための政策の検討を行うことが、私の主たる研究の目的です。本研究は今年度も継続します。私のもう一つの研究計画である、日本の水稻の保険制度の研究は、リスク要因と食糧問題との関連というIFPRIの一つの研究重点に関わった計画であり、IFPRIのスタッフの編集による本の1章になる予定です。

IFPRIは東南アジア研究センターのように特定の地域を対象とした研究所ではありません。方法論的性格からでしょうが、上述4プログラム構成から明らかなように問題を対象とした研究所といえるでしょう。ここでの研究の対象地域は世界の全低開発地域ですが、アジアはアフリカと並ぶ重要な対象地域となっています。アジアでの研究プロジェクト数はインド亜大陸関係が最も多く、東南アジア関係は第2位で、あと中近東、中国という順番です。東南アジア関係の最近のプロジェクトは、タイ国、フィリピン、マレーシア、インドネシアの国レベルの研究を中心に、国内地域レベルと国際レベルでも行われています。タイ国では私のプロジェクトのほか、食糧消費と所得分配との関係の研究、食糧政策と経済発展に関する研究が行われ、フィリピンとマレーシアでは灌漑と食糧生産およびリスクの研究が行われています。マレーシアではさらに、部門間のリンケージの研究が地域レベルで実施され、インドネシアでは食糧に関する安全保障の研究が行われています。また、東南アジアの国際レベルでは米穀の市場・貿易・政策の研究が最近完成しました。（京都大学農学部講師）